巻頭言

常に問題意識をもって柔軟な姿勢で新しい技術的展開を

理事　大西英雄

年末から年始にかけ例年にない穏やかな晴天が続き、何となく平和で明るい新年を迎えることができました。新春の新聞やテレビは、昭和６０年代は来るべき２１世紀への大事な準備の時期であると同時に、ハイテクノロジーの一層の進展、国際化、高齢化の進行とあいまって、今迄にもまして変化のスピードが早いだろうと報じております。こうした背景のもと、政府では三全総、地方ではマスタープランの再検討により２１世紀へのビジョン構築の作業が進められています。当地京阪神都市圏に眼を向けてみますと、今年は多年の悲願であった関西新空港がいよいよ着工を迎え、また京阪奈学研都市構想も一歩進んだ調査費が認められ、行政、経済界ともども２１世紀への繁栄を目指して活気づいています。一方、個々の民間企業では、この変化の激しい時代を如何に勝ち抜いてゆくかその経営戦略が焦点となっています。今日の企業はたとえてみると薄皮饅頭の皮のようなもので、中身はどんどん変ってゆくといわれ、新年の某紙のトップインタビューの中では、これからの経営の３本柱として

1. 変化に即応できる組織づくり
2. 変化に対応できる資産づくり
3. 人材の育成

があげられていました。変化に即応して組織の活力を如何に持続させてゆくか、この今日的課題は、また一人一人が如何に業務に対処してゆくかの問題でもあるわけです。著名なジャーナリスト扇谷正造氏は常に問題意識をもって対処することが何より大事であり、その３つのポイントとして

1. 空気に爪をたてる。例えば笑い話しとして聞き流してしまうような情報で

も爪をたててみる

2. 原点に立ち返って洗い直してみる

3. 自由に発想する

をあげられていました。このことは、また仕事を通じての個人の生き甲斐の問題にもつながるといっております。

ところで私どもの公団事業に眼を向けてみますと、一世帯にほぼ一台という自動車社会の到来は、高密度な都市交通に高速道路を欠かせないものとしました。万博後の一時期の冬の時代と比べますと公団事業は大きく伸展いたしますと共に、とりわけ新空港着工のインパクトもあって湾岸線の促進、第2リング、第2京阪線の具体化等阪神高速道路の整備に対する要望が非常に高まってきています。しかし一方、事業サイドからみますと、市民、地域社会のニーズの変化、脱工業化即ち国際化、情報化に対する街づくり等から事業を進めるに当たって都市計画、都市再開発との調整、景観、環境保全、更には供用時の安全管理等、構造、工法をはじめ量的にも質的にも解決すべき多岐にわたる問題が山積しています。また、これらの事業の採算性の確保も事業費の増大につれ一段と重要性を増し、いわば総合的事業監理について早急な検討が必要となってきています。こうした難問を解決する諸兄の努力が今後とも継続され、その成果を技報を通じ職員の皆様が共有されることを願うものであります。